

平成 22 年 6 月 24 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19730341

研究課題名（和文） 職業における“楽しみ”の階層研究

研究課題名（英文） The Social Stratification of “work enjoyment”

研究代表者

小宮山 智志（KOMIYAMA SATOSHI）

新潟国際情報大学・情報文化学部・情報システム学科・准教授

研究者番号：40329347

研究成果の概要（和文）：「働くことは楽しい」と感じている人々は、次のとおりである。

1. 専門的職業・販売的職業の人々は、職業を楽しんでいる傾向がある。
2. 自己実現の機会・人間関係の良好さ・職務の重要性・報酬と仕事の整合性・自主性・能力を伸ばす意思は、職業を楽しむことと関連がある。

研究成果の概要（英文）：Those people who feel "Working is enjoyable", also had the following features:

1. People who had a professional occupation or who were in sales tend to enjoy their work.
2. There was a high correlation among the factors of “work enjoyment” and “An opportunity for self-realization”, “good human relations”, “significance of work”, “fairness of salary”, “independency”, and “ability to develop oneself in one's profession”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	690,000	3,690,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：階層研究・計量分析・質問紙調査・聞き取り調査・フロー経験

## 1. 研究開始当初の背景

最高裁が、関西水俣病訴訟で、国と熊本県の行政責任を認める判断を示した。しかし行政の怠慢、企業の不正隠しはあとを絶つことがない。見田宗介は著書『現代社会の理論』

（岩波書店 1996 年）の中で、情報化/消費化社会という強力な需要創出メカニズムと、需要の創出による環境・資源・南北の貧困問題と、それを不可視化するメカニズムの関連を説いている。

耐震偽装・薬害エイズ・三菱リコール隠し等、度重なる不祥事の現状を鑑みると、この問題が根本的な解決に向かっているとは思えない。しかし我々が情報化社会を捨てられないと仮定するならば、マイナスの側面を解消し、新たな“情報化社会”を創出することが社会学理論に課せられた急務の一つではなかるうか。

職業における“楽しみ”という情報による財の価値の復権がなされることで、環境問題と需要創出とを両立する社会への大きな足がかりになると考え、本研究を行うに至った。外発的動機に大きく目を奪われるあまり、人々は自らを「職業自体の喜び」から疎外し、また他者の喜びを疎外することに無頓着になる。そして外発的動機に身をゆだねることが職務怠慢、ひいては他者に致命的な損害を与えることにつながる重大な要因の一つだと考えられる。

職業における“楽しみ”を社会的資源ととらえ、これを公正に再配分することで、お互いの喜びを共感できる社会の実現に大きく踏み出せると確信し、この研究を私のライフワークのひとつとする決意を固めるに至った。

## 2. 研究の目的

「働くことが楽しい」と感じている人々は、どのような人々なのだろうか。これを調査によって明らかにすることで、職業の楽しみの要因を探り、働くことを楽しめる社会を考察する。

## 3. 研究の方法

研究方法としては探索的段階であることを踏まえ、二通りのアプローチを併用する。第一はインタビュー調査によって職業における“楽しみ”を明らかにすることである。

次に今後の全国または国際比較による確証的研究の橋渡しとして地域限定の質問紙調査を行う。この問題における質問紙調査の定型を築き上げ、そして地域限定ではあるが訪問面接調査による仮説の確証的検証を行うことが第二のアプローチの目的である。

### (1) インタビュー調査 (2007年度)

研究初期段階であるので、“楽しみ”に至るプロセスを探ることを重視し、さまざまな職業の協力者に長時間のインタビューを行なう。なお13名から、それぞれ2～4時間程度、調査にご協力いただいた。

業種・職種・雇用形態・年齢・性別において、バリエーション豊かに調査することができた。長時間のインタビューにより、さまざまな「楽しむに至る、または至れないプロセス」が存在することを解明した。例えば“楽しむ”ために「行為への機会が行為者の技能

とつり合っている」ことが重要であるとされている (Csikszentmihalyi, Mihaly, 1977)。しかし時代の変化の中で自己の技能を十分に発揮する場が減少しているケース、機会を与えられているが、職場の慣習によってオーバーワークを強いられるケースなど、個人が“つり合い”をとることが難しい、さまざまな原因が存在した。この少数事例調査で得られた知見を、質問紙調査によって、分布と原因を検証した (2008年度)。

### (2) 質問紙調査 (2008年度)

2009年2月、新潟市を母集団とした訪問留め置き郵送調査を実施した (以下新潟市調査)。計画サンプルは400 (二段抽出法: 人口比に応じて20地点を抽出。各地点20世帯。対象となった世帯で複数名の勤労者または勤労経験者がいた場合は、誕生日がもっとも近い方を調査対象として選んだ。)、有効回答数は155票だった。サンプリングは住宅地図を用いた。勤労者・勤労経験者が不在なことが判明した世帯や、転居が確認された10世帯を除くと回収率は約40%であった。

年代別にみると、20代の回答が7.1% (11票) と少なかった (30～60代は20%前後)。仕事の楽しさの分配は、年代によって大きく異なるであろう。特に若者における分布は重要である。そこで追加調査として本学を3年前に卒業した学生に調査を行った (2010年2月に調査実施。回収率18%。以下卒業生調査)。

## 4. 研究成果

2009年度新潟市調査を中心に成果を報告し、これを補足する形で、インタビュー調査・卒業生調査の成果について言及する。

新潟市調査・卒業生調査において次の質問を実施した。

仕事を行っているとき、その仕事をどのように感じていますか。(ア)～(シ)の項目について、それぞれ選択肢の中でもっともあてはまるものの番号に○印をしてください。

(ア) 仕事を楽しいと感じている。

(イ) 仕事をつまらないと感じている。

(ウ) 仕事をつらいと感じている。

(エ) 職場の人間関係に恵まれていると感じている。

(オ) 仕事に対する報酬 (賃金・利益など) は自分の働きに見合っていると思う。

(カ) 仕事を「やらされている」と感じている

(キ) 仕事を自分から進んでやっていると感じている。

(ク) 重要な仕事を任されていると感じている。

(ケ) 仕事で自分の工夫・アイデア (ちょっとした工夫でも構いません) を実行

する機会がある。

(コ) 自分のアイディア・工夫を実行することができ、さらにその成果を実感することができる。

(サ) 仕事のために勉強を続けなければと義務感を感じている。

(シ) 仕事のために自主的に勉強を続けたいと考えている。

(ア)～(ウ)の回答者割合を図1に示した。「(ア) 仕事を楽しい」と感じている人々は、6割(62%、93名)に達し、「(イ) 仕事がつまらない」の28%(41名)、「(ウ) 仕事がつらい」の44%(66名)の回答者割合を大きく上回る。

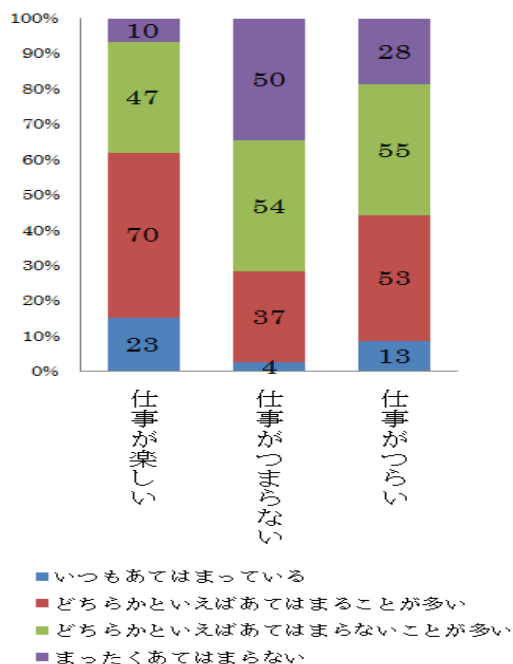


図1 職業の楽しさ(新潟市調査)

この結果から、母集団において「多くの人々が仕事を楽しんでいる」とは言えないであろう。回答者の職業分類をみると、専門的職業31名、管理的職業21名、事務的職業22名、販売的職業24名、熟練的職業19名、半熟練的職業13名、非熟練的職業2名、農林漁業5名、職業無回答13名となっている(SSM職業大分類(1995年SSM調査研究会1995)を使用)。

専門的職業が、最も多いことから、母集団(実際の新潟市の分布)に比べて回答者に、偏りがあると思われる。後述するが、専門職の人々は、職業を楽しんでいる傾向にある。つまり職業に「楽しさ」を感じている人々が調査に協力的であったために、回答者の中で職業を楽しんでいる人々の割合が高かったのではないかと推測される。

そこで次に職業分類別に(ア)～(ウ)の

項目ごとに肯定的な回答(いつも当てはまっている・どちらかといえば当てはまっている)の割合を見ていこう(図2:回答者数が少ない半熟練的職業・非熟練的職業・農林漁業・無回答はグラフにおいては省略した)。

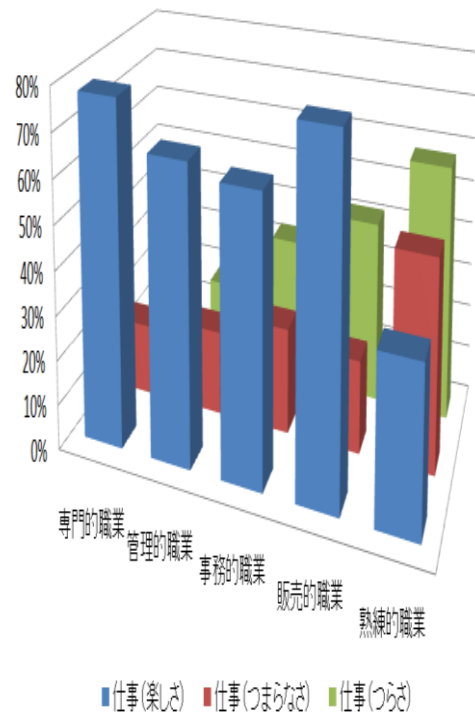


図2 職業分類別「楽しさ」割合

専門的職業(75.5%)・販売的職業(79.2%)において「楽しむ」割合が高い。熟練的職業は「楽しさ」を感じている人々の割合がもっとも低く(37%)、「つまらなさ」(47%)・「つらさ」(58%)を感じている割合がもっとも高い。

さてこのような差は、なぜ生じるのだろうか。先に示した「仕事を行っているとき、その仕事をどのように感じていますか」という問いにおける質問項目(エ)～(シ)人間関係・報酬満足感・義務感・自主性・役割の明確さ・アイディアや工夫を実行する機会・実行後の結果の明確さ・能力拡張義務感・能力拡張自主性との関連を見ていこう。

図3は、新潟市調査における「アイディアや工夫を実行する機会」の回答別の職業を楽しんでいる回答者の割合である。「アイディアや工夫を実行する機会」を持っているほど(棒グラフが左側であるほど)職業を楽しんでいることがわかる(青・赤色部分が多い)。

新潟市調査においては(エ)人間関係・(オ)報酬満足感・(カ)義務感・(キ)自主性・(ク)

役割の明確さ・(ケ) アイディアや工夫を実行する機会・(コ) 実行後の結果の明確さ・

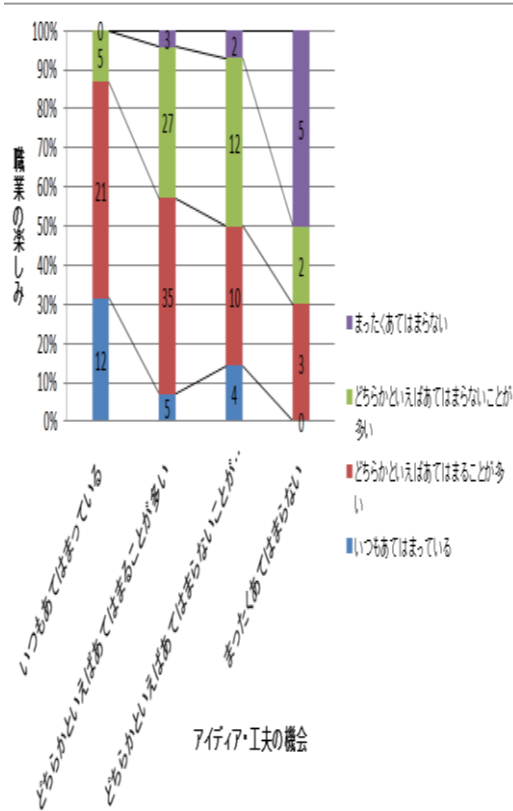


図 3 アイディア・工夫の機会別職業を楽しむ割合 (新潟市調査)

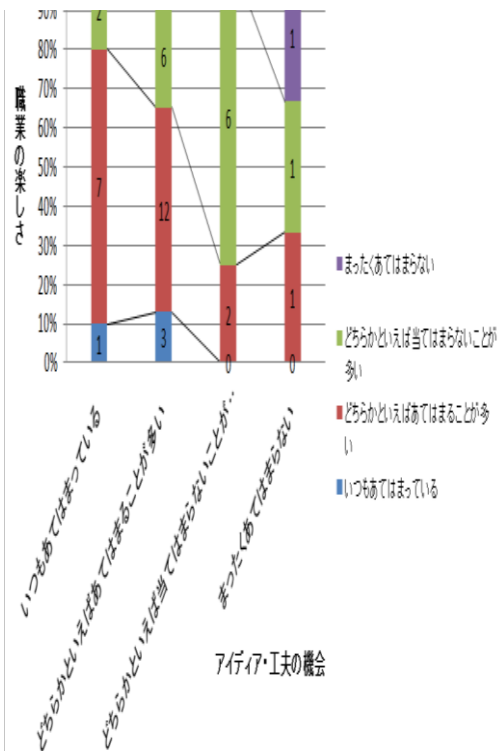


図 4 アイディア・工夫の機会別職業を楽しむ割合 (卒業生調査)

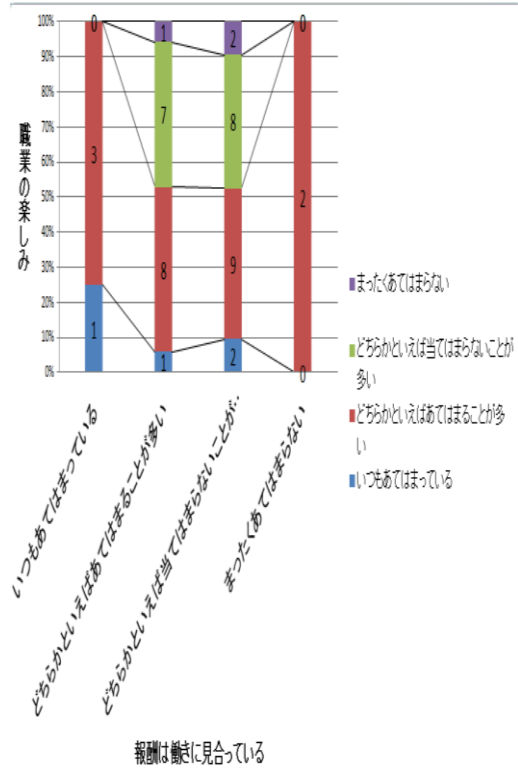


図 5 報酬の満足度別職業を楽しむ割合 (卒業生調査)

(サ) 能力拡張義務感・(シ) 能力拡張自主性においても、同様に職業の楽しみと関連が見られた。すなわち人間関係に満足しているほど、報酬に満足しているほど、自主的に働いているほど、義務感で働いていないほど、重要な役割を任されていると感じているほど、職務のために能力を伸ばそうと考えている(義務感・自主性ともに)ほど、職業を楽しんでいる。

これは、ほぼ、既存の研究から予測された仮説のとおりである。しかし卒業生調査では必ずしもこの傾向は見られなかった。図 4 は卒業生調査における「アイディアや工夫を実行する機会」の回答別の職業を楽しんでいる回答者の割合である(現在、正社員として働いている 42 名の分析結果)。新潟市調査同様に、「アイディアや工夫を実行する機会」を持っているほど職業を楽しんでいることがわかる。

図 5 は「仕事に対する報酬(賃金・利益など)は自分の働きに見合っていると思う」という回答別の職業を楽しんでいる回答者の割合である。新潟市調査とは異なり、報酬が、職務に見合っていると感じているほど、職業を楽しむという傾向は見られない。(エ)～(ス)の項目の中では、(ケ) アイディアや

工夫を実行する機会・(コ) アイディアや工夫の実行後の結果の明確さをのぞく項目は、職業の楽しさと関連が見られなかった。

報酬に関して言えば、年功序列の慣習の残る地域において、就職して3年という時期を考えれば、当然の結果に思える。しかし人間関係については予想外であった。人間関係が良好だと感じているにもかかわらず、職業の楽しみを感じていない若者も少なくなかった。

この結果は、「働き始めて3年」の世代は、価値観が多様なために生じたのではないかと考えている。インタビューの中でも、この傾向が見られた。先に示したように、多くの機会を与えられているが、職場の慣習によってオーバーワークとなり、楽しみに至らないケースなど、さまざまな原因が存在した。

若い世代において「人間関係・報酬満足感・自主性（義務感）・アイディアや工夫を実行する機会・実行後の結果の明確さ・能力拡張義務感・能力拡張自主性」など、一律には職業に結びついていないことは、職業の楽しみの分配の可能性を示唆している。

ワークシェアリングの工夫や、または転職時・兼業などによる職業の組み合わせによって、“仕事の楽しさ”を分配することができるのではないだろうか。

#### 参考文献

Csikszentmihalyi, Mihaly, 1977, Beyond boredom and anxiety, San Francisco: Jossey-Bass Publishers. (=1991, 今村浩明訳『楽しむということ』思索社.)

1995年SSM調査研究会, 1995, 『SSM職業分類・産業分類(95年版)』1995年SSM調査研究会.

見田宗介, 1996, 『現代社会の理論』岩波書店.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小宮山 智志 (KOMIYAMA SATOSHI)

新潟国際情報大学・情報文化学部・准教授

研究者番号：40329347

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし